

気が付けば、スウェーデンハウスを建てては9年。
オーナーコピーライターのひとりだ。

ウアの家

『巣立つ日まで』

昨年の夏休み前、小学校の個人面談でのこと。担任の先生が一枚のプリントを私に見せた。「楽しい夏休み」と題されたそのプリントの中ほどに、「夏休みに楽しみにしていること」という質問項目があり、うちの娘は大きな字で「家でのおんびりする」とだけ回答していた。笑いをこらえるような顔で先生は「家でのんびりしたいらしいですよ」と念を押すように言う。言外に

「他に何かないんですか」というニュアンスが感じられ、私も思わず苦笑した。

でも——いいじゃないか、べつに。あの子は家が好きなんですよ。特別何をするわけでもないけれど、家で過ごす時間が好きなんです。だめですか？

きっと他の子どもたちは、旅行や帰省、海、山、プール、遊園地：夏ならではのアクティビティに触れ、チャレンジを宣言

し、ワクワクするようなことを書いていたんだろう。家でのおんびりなんて、疲れた大人のため息みたいに聞こえちゃうんだろうなあ。うちの小学校は家庭訪問もないから、先生はうちの居心地良さを知らないだろう。一方うちの娘も、相変わらずの超マイペース。他の子の回答を気にも留めず、自分の思ったままを書いたに違いない。見栄を張ったり、背伸びをしない姿は、子どもながらなかなか天晴だと私は思う。

小学校も高学年になると、女の子たちはそれなりに生意気になり、親に反発しはじめる。家にいるより、放課後は友達と過ごす方が楽しい年齢になってくる。成長の一過程であり、とても自然なことだ。そんな中、一年経った今でも「家が好き」と言う我が娘。少々幼いような気がするが：まあ、納得のいくまで

いればいいさ、と見守っている。

この子もいつか、巣立つのだろう。しかし、帰るべき巣が居心地の良いものでなければ、結果、小鳥たちはなかなか巣立とうとはしないのだという。高く、遠くへ飛び立つために、今、彼女はしっかりと翼を磨いている。

今年も夏がやってくる。11歳の夏は今年だけ。まっすぐ、健康やかに、大きくなっていくんだよ。



気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや9年。
オーナーコピーライターのひとりだ。

ウアの我が家

いつも美味しい自家製糠漬けをくださるご近所さんがいて、娘も夫も、いただくたびに奪い合うようにして食べている。生来ズボラな性格なので、面倒なことには手を出さない主義なのだが、そんな光景を目の当たりにするうちに、ついに重い腰をあげることにした。糠漬けデビューである。

便利な世の中になったもので、何事もたいがいノウハウはインターネットで入手できる。おそるおそるのぞいてみると、そこには「糠漬けは面倒」との噂を蹴散らすように、いろいろな糠漬けグッズが紹介されていた。

『私の糠漬け』

朝晩混ぜ返さなくてもOKの糠漬けの素や、老舗漬物屋が予めブレンドしてくれた糠、ハンドルをくると回すと糠が攪拌される容器…なるほどこれなら誰だって気軽に糠漬けに挑戦できるじゃないか。素晴らしい！

——しかし、さんざん調べて迷った挙句、私が入手したのは無農薬米の生糠と、普通の琺瑯容器だけだった。「本当は」どう

するのか——母や祖母たちはどうやってきたのか知りたかったし、「簡単」ではない時間を過ごすことで、その糠床は私の、特別なものになるような気がしたからだ。

よく分からないところは実家の母に電話をした。例のご近所さんにも教えを乞うた。そしてともにかくにも、私の糠床は産声をあげた。



若い頃には体力も時間もたくさんあったのに、何でも簡単に、効率よく、と考えがちだった。いつの頃からだろう（スウェーデンハウスに住むようになって拍車がかかっているように思うが）、時間をかけ、手をかけ、長く愛せるものを好むようになったのは。

時間をかけることで美味しくなったり、美しくなったり、強くなったり…全てがそうなるわけではないけれど、こと時代を超えて伝えられていくもの、特に「衣食住」に関しては、「本物」にこだわりたい。ほどほどのものをほどほどに使い、不要になれば手放す…簡単に手に入れたものは簡単に去っていくのだと私は思う。胸をはって娘に手渡せるもの、伝えたいものは、きっとそこにはそんなに多く残らない。そんなことを考えながら、今日も愛しの糠床に、胡瓜と茄子をつつこんでいる。

気が付けば、スウェーデンハウスを建ててはや9年。
オーナーコピーライターのひとりだ。

ウアの我が家

「寒い」という状況が人一倍苦手なくせに、子どもの頃から十二月が嬉しい。クリスマスを祝って、冬休みになって、大晦日の後にはお正月がくる。みんなが笑っている季節。しかも次には春が待っている。

クリスマスの思い出の一つに、母の焼いてくれたケーキがある。その年、彼女はどこからか新しいレシピを入手してきたらしく、スポンジケーキの間にオレンジムースが挟んであるという、一手間かけた、凝ったケーキを作ってくれた。しかし、何かが上手くいかなかったようで、出来上がりに包丁を入れた途端、ムー

ス部分がずるずると滑り落ち、ビジュアル的に残念なケーキになってしまった。母は「二度と作らない」と言っていたが、私は「お店で買ったケーキみたい!」と感激して食べた。見た目は悪くても味には何の問題もなかったし、母の悪戦苦闘を横で見ている私にとって、その美味しさはひとしおだった。

年末・年始の思い出もやはり台所だ。何品ものおせち料理を作りながら、年越し蕎麦の用意までしなければいけない母が、家族の輪に加わるのは、きまって紅白歌合戦も終わる頃だった。みんな揃ってTVが見たい私は、

「家」

寒い廊下を走って居間と台所を行き来し、「ねえ、もうすぐ〇〇が歌うよ」と誘うついでに、つまみ食いをしては叱られた。

十二月の記憶はいつだって家族と、家から始まる。祖父や祖母がいた冬、大雪が降った冬、台所が新しくなった冬、下宿から姉が帰ってきた冬……「家」は記憶を育み、思いを繋ぎ、自分を確かめる場所だった。

「お店で買ったみたい!」と喜んだケーキ。今は「お店なんかじゃ買えないケーキ」だったと分かる。新しい服を着てきちんと座り、お雑煮を前に、父がニコニコと新年の挨拶をする瞬間の澄んだ空気。三人姉妹のそれぞれが家族を持った今では「もう一度」というわけにもいかないが、確かな記憶は季節が巡る毎に蘇り、身体の深い部分をあたためる。

今年の冬は少しゆつくりと、田舎に帰りたいたいと思っている。

